

## メッセージアウトライン

### コリント人への手紙 第二10:7~18 「誇る者は主を誇れ」

[7] 「あなたがたは、うわべのことだけを見えています。もし自分はキリストに属する者だと確信している人がいるなら、その人は、自分がキリストに属しているように、私たちもまたキリストに属しているということを、もう一度、自分でよく考えなさい」

パウロを批判する偽教師たちはうわべだけで彼を判断するという間違いを犯し、自分たちの方が立派であり、本物だと主張していた。しかし、パウロという人物をよく調べるならばとてもこんなの外れなことは言えない。パウロは彼らに対して「私たちもまたキリストに属している」ということをよく考えよと指摘する。

[8] 「あなたがたを倒すためではなく、立てるために主が私たちに授けられた権威については、たとい私が多少誇りすぎるがあっても、恥とはならないでしょう」

パウロは自分自身を誇るのではなく、主から与えられた使徒としての権威を誇る。それは教会を立て上げるために与えられたものであり、決して、倒すためのものではない。この権威を誇るということは、それを与えられた主イエス・キリストを誇ることであり、決して自分自身を何か偉い者のようにいばるという意味ではない。

[9-10] 「私は手紙であなたがたをおどしているかのように見られたくありません。彼らは言います。『パウロの手紙は重みがあって力強いが、実際に会った場合の彼は弱々しく、その話しぶりは、なっていない』」

パウロは彼らの非難のことばをそのまま引用する。彼は確かに使徒としての権威を強く主張するが、コリント教会の人々をおどしているのではない。彼は伝道のために行った先々で謙遜にふるまった。→使徒20:19 ところが偽教師たちはそれを誤解して「…彼は弱々しい…なっていない」と非難していた。しかし、救いの真理を語る者は自分の力により頼むのではなく、神の力により頼むことが必要である。それは、はた目には洗練されていないように取られるかもしれないが、救われた人々の信仰が「人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるため」(Iコリント2:5)に必要なことであった。

[11] 「そういう人はよく承知しておきなさい。離れているときに書く手紙のことばがそうなら、いっしょにいるときの行動もそのとおりです」

パウロが手紙の中できびしいことを言っているのは、決しておどしではない。それはその時、そのように書く必要があったからである。そして、今度彼が行った時にはそういう偽教師たちに手紙に書いたような強い態度で臨むぞという決意がここに現されている。

[12] 「私たちは、自己推薦をしているような人たちの中のどれかと自分を同列に置いたり、比較したりしようなどとは思いません。しかし、彼らが自分たちの間で自分を量ったり、比較したりしているのは、知恵のないことなのです」

偽教師たちは自分で自分を推薦して自分をほめていた。自画自賛である。それで互

いに量ったり、比較したりしていた。しかし、パウロはそんなことをしているのは知恵のないことなのだと断言する。

[13-14]「私たちは、限度を越えて誇りはしません。私たちがあなたがたのところまで行くのも、神が私たちに量って割り当ててくださった限度内で行くのです。私たちは、あなたがたのところまでは行かないのに無理に手を伸ばしているのではありません。事実、私たちは、キリストの福音を携えてあなたがたのところまで行ったのです」

彼が自分の働きの範囲として心得ていたところは神から割り当てていただいたものであった。コリントまで伝道したのもその範囲内でのことである。異邦人への開拓伝道→使徒9:15、ローマ11:13 これが彼の使命であり、伝道の範囲なのである。

[15-16]「私たちは、自分の限度を越えてほかの人の働きを誇ることはしません。ただ、あなたがたの信仰が成長し、あなたがたによって、私たちの領域内で私たちの働きが広げられることを望んでいます。それは、私たちがあなたがたの向こうの地域まで福音を宣べ伝えるためであって、決して他の人の領域でなされた働きを誇るためではないのです」

パウロの心からの望みは、コリント教会の信徒の信仰が成長して、彼らによって福音伝道の働きの範囲がさらに広げられていくことであった。「向こうの地域」…ローマ、イスパニヤが彼の視界に入っていた。→ローマ15:23～24、28

彼は他の人が伝道したところへ入り込んで、その人たちの働きをさも自分のもののように誇る人物ではない。

[17]「誇る者は主を誇りなさい」

誇るべきものは、私たちクリスチャンの内にはなく、それは主ご自身である。なぜなら、伝道の働きも含めて、すべて良きものは主から来るからである。私たちはただ主の手にある器にすぎない。

[18]「自分で自分を推薦する人でなく、主に推薦される人こそ、受け入れられる人です」

自分を誇り、自分で自分を推薦して自分に栄光を帰する者は、決して主の働き人ということとはできない。主に認められ、主に推薦される人こそ真の働き人であり、人々からも受け入れられる人である。

このようにパウロは彼に反対する者たちの誇りがいかに空しいかを示し、そのような人々に惑わされないで正しい福音に立つことを願っている。私たちも自分自身を誇る者ではなく、主ご自身を誇る者とならなければならない。